東京写真遺産

ニュース 読者発 4

1920年・小石川

「町のすし屋」が開店

心意気 変わらない

一九二〇（大正九）年、東京市小石川区（現・文京区小石川）で、すし店「金寿し」が開店したときの一枚だ。

紋付き羽織はかま姿で中央に立つ若者は、店主の羽鳥金作さん。修業先の鮮魚店の主人がやぐらやのぼり旗を用意し、弟子の門出を盛大に祝ったとみられる。

店は現在、金作さんの孫・孝一さん（六三）が、三代目として受け継ぐ。その歩みは、小石川の町の歴史とともにあった。

戦前から印刷業が集まり、大手から下請けの町工場まで、多くの労働者が行き交った小石川。金寿しの客も彼らが中心だった。だが、太平洋戦争の空襲で店は焼失。焼け跡に建てたバラックで営業を続けた。

孝一さんの母せつさん（六七）は戦後間もなく、近所だったバラックの金寿しにおつかいに行ったことを覚えている。

「魚は手に入らないから、野菜だけのちらしずし。ゴボウやハスが入っていて、おいしかった。コメも足りず、配給米を店に持ち込んで、すしと交換なんです。そんな状況でも店を続けた金作さんは、とても働き者でした」

大人になったせつさんは、金寿しにお手伝いに行くようになり、やがて二代目の故・栄一さんに嫁いだ。見よう見まねですしの握り方を覚え、店が忙しくなると応援に入った。「百人前くらいはわけない。下手な職人には負けないわよ」

㊤金寿しの店内に飾られている大正９（1920）年の開店時に撮影された写真。初代店主の羽鳥金作さんを修業先の人たちが囲む。中央右に人物不明の顔写真が貼り付けられている ㊦谷地である小石川は大雨になるとたびたび水につかった。金寿し周辺の路地で、長靴姿のせつさん㊨（1958年ごろ撮影）＝いずれも文京区で（羽鳥孝一さん提供）

◆今ではあまり見られなくなった日常生活や行事の様子、街の姿など、ご家庭にある過去の写真をお寄せください。〒100　8525（住所不要）東京新聞読者部「東京写真遺産」係。

一階建ての長屋の上に、さらにやぐらが組まれ、大量ののぼり旗がはためく。物珍しかったのだろう、集まってきた近所の子どもたちも写真に納まっている。

孝一さんは三十歳で修業を終えて店に入った。昭和三十～五十年代、印刷業はさらに栄え、接待や仕事終わりの町工場の人たちで店はいつも大にぎわい。「昼間から取引先と酒を飲み、仕事の約束に遅れそうになって、ハイヤーで電車を追いかけた猛者もいました」。出前もひっきりなしで、店は地元の生活に密着していた。

だが、平成に入ってからの長い不況で、工場は次々に畳まれ、労働者の多くは町を去った。昭和三十年代から続く製本工場を経営する榎本義明さん（六一）＝同区小石川＝は「今は地図はカーナビ、辞書は電子辞書で製本屋も減った。工場がなくなりマンションが建って、静かな町になった」と話す。

現在の店内。3代目店主の羽鳥孝一さん㊨が伝統の味を受け継ぐ＝戸上航一撮影

小石川周辺に四十軒以上あった「町のすし屋」も十数軒にまで減った。「回転ずしと値段で勝負はできない。だから、絶対に手は抜かない」と孝一さん。魚は毎朝築地で仕入れ、自前で仕込む。かんぴょうにも手間を惜しまず、煮る時間やたれの濃さの微妙な加減を今も続ける。

店は二〇二〇年に創業百年を迎える。「町も食文化も変わったけれど、先々代や先代と同じように質にこだわった仕事を続けたい」

＝随時掲載します。

文・小野沢健太／紙面構成・若林和也

ホシガラス（星鴉）

山梨県鳴沢村の富士山５合目の奥庭（標高2200㍍）で９月24日、木の枝に止まるホシガラス。黒褐色の体に白い斑点があり、斑が星のように見えることが名の由来という。展望台周辺で数回フワフワと飛んでくれた。

留鳥または漂鳥で亜高山から高山帯の針葉樹林に暮らすカラス科。秋は好物の松の実を土や木の中に蓄える貯食行動の習性がある。その一部が芽を出すので、「森を再生する鳥」とも言われる。全長35㌢。（写真と文・堀内洋助）

高い山のカラス

探鳥

日々チョウカンヌ

今日は「達磨（だるま）忌」。禅宗のお寺で達磨大師さまをしのぶの。達磨さんはインドの元王子様で中国で活躍されたお坊さん。丸い姿は座禅を組むポーズよ。

Instagram@choukanne

fax 03-3595-6920　email t-hatsu@tokyo-np.co.jp